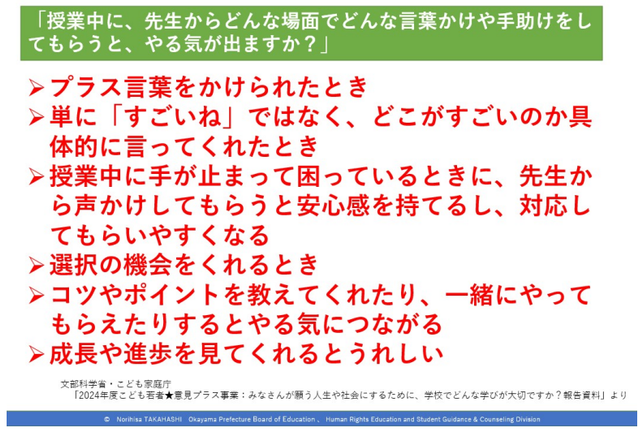
コラム　人生課長の独り言～一歩進めるためのヒント～

「実況中継」が児童生徒の安心感を育む

授業中、私たちの目はつい「立ち歩き」や「おしゃべり」といった不適切な行動に向きがちです。しかし、児童生徒の「心の基礎（土台）」を耕すために最も効果的なのは、実は「すでにできている当たり前の行動」への肯定的な着目です。特におすすめしたいのが、児童生徒の様子をそのまま言葉にする「行動の説明（描写）」です。

「ノートを開いたね」「前を向いて話を聴いているね」「タブレットで丁寧に調べているね」

このように、評価を挟まずに「実況中継」をすることで、児童生徒は「先生が自分を見てくれている」という強い安心感（無条件のストローク※）を得ることができます。



さらに、「具体的な賞賛」や「貢献への感謝」を組み合わせると、より効果的です。

「自分の言葉で伝えようとしたね。立派だよ」「プリント配りを手伝ってくれてありがとう。助かるよ」 などなど。

こうした「勇気づけ」の言葉は、結果だけでなくプロセスや貢献に光を当て、児童生徒の自己有用感を高めます。

特別な成功・成果を待つ必要はありません。「当たり前」を認め、言葉にする。その積み重ねが割れた「心の器」を修復し、学習に向かうエネルギーを蓄える土壌になります。まずは、クラスの児童生徒に「実況中継」を届けてみることから始めてみませんか。（髙橋）

※「ストローク」については、いつか詳しく考えたいと思っています。

人権教育・生徒指導課のホームページもご覧ください。
https://www.pref.okayama.jp/soshiki/350/

Vol.47　　発行日　令和8年7月

岡山県教育庁　人権教育・生徒指導課

生徒指導 Leaflet @ OKAYAMA
リーフ

誰一人取り残されない岡山県の教育に向けて

「心の基礎（土台）」モデル②

「心の基礎（土台）」モデルは、建物の構造に例えられることがあります。社会的能力が建物そのもの、心のエネルギーが建物の基礎や柱、そして土台部分が地盤とイメージすると、不登校など課題を表出している児童生徒は、建物の部分が崩れそうになっているわけですが、その不安定さは基礎の部分にあるのか？それとも地盤そのものの弱さにあるのか？を見極めて、適切に補強していかなければならないということになります。地盤改良ができていないのに、基礎や柱の補強をしても、建物の強度は上がらないですからね。今回は、このモデルの最大の特徴といえる「土台」を強化する方法について考えます。

岡山県教育庁
人権教育・生徒指導課

〒700-8570
岡山県岡山市北区内山下２－４－６
Tel:086-226-7589　Fax:086-224-2134

Q.「心の基礎（土台）」モデルをもとに、児童生徒を支えるポイントを教えてください？

A.最大のポイントは、「支援は必ず下の階層から行う」ということです。それぞれの状態を見極めながら、

①土台の修復: まずは「評価」や「指導」を脇に置き、本人が「ここは安全だ」「自分は否定されない」と思える環境を作ります。

②エネルギーの充填: 土台が安定してくると、「ちょっとやってみようかな」というエネルギーが、児童生徒のなかに自然と溜まってきます。

③症状へのアプローチ: エネルギーが満ちて初めて、登校の工夫や学習支援などの「建物の修復」が意味を成します。エネルギーが満ちてきていることを確かめながら、社会的能力の改善にアプローチして、課題の改善（＝自己実現）を目指します。

児童生徒の状態の見極め（児童生徒理解）が重要

土台の修復のために、教師ができること

教員が「心の基礎（土台）」を支えるために最も重要な役割は、評価者としての役割をいったん脇に置き、児童生徒にとっての「安全基地（ありのままを認める人）」になるなど、人間の良さ体験を保障する存在となることです。

例１　登校時・教室入室時の「挨拶＋アルファ」

場面：朝、教室に入ってきたときや廊下ですれ違ったとき。

NG対応：「今日は遅刻しなかったな！」「宿題は持ってきたか？」

↓

土台を固める対応：「存在そのもの」を認める声掛け

「おはよう。顔が見られて嬉しいよ」

「今日は一段と冷えるね、体調はどう？」

例２　授業中の「非審判的」な関わり

場面：指名に答えられなかったり、作業が遅れたりしているとき。

『提要』のダウンロードはコチラ

NG対応：「なんでできないんだ？」「もっと集中しなさい」

↓

土台を固める対応：「プロセスと感情」への共感

「ここは難しいよね。先生も昔、苦労したよ」

「考えている時間が大事だから、ゆっくりでいいよ」

「書けないくらい悩んでるんだね。一緒に一行目だけ考えてみない？」

発達支持的生徒指導

例３　面談や放課後の「聞き役」に徹する時間

場面：放課後や休み時間、児童生徒が愚痴や不満を言いに来たとき。

NG対応：「でも、相手にも事情があるよ」「君にも原因があるよ」

↓

土台を固める対応：「アクティブ・リスニング（積極的傾聴）」

「そうか、それは悔しかったね（感情のラベル貼り）」

「そんな風に感じていたんだね。話してくれてありがとう（自己開示への感謝）」

日常的なあたたかい関わりが重要ですが、教員自身が対応を焦ると、その焦りが生徒の土台をさらに揺さぶることがあります。まずは「今の状態のままでも、あなたを大切に思っている」というサインを出し続けることが、結果として最も近道になります。

教師こそ、児童生徒にとって最も身近な「人間」

発達支持的生徒指導のマインドセット

「心の基礎（土台）」を固めることは、児童生徒が「自己存在感」を感じるということです。そういう意味で「心の基礎（土台）」モデルは、発達支持的生徒指導と非常に親和性の高い考え方と言えます。

POINT

「発達支持的生徒指導」を進めるコミュニケーション

参考文献：菅野　純（2007）『教師のためのカウンセリング実践講座』金子書房